

地方自治学習会報告書

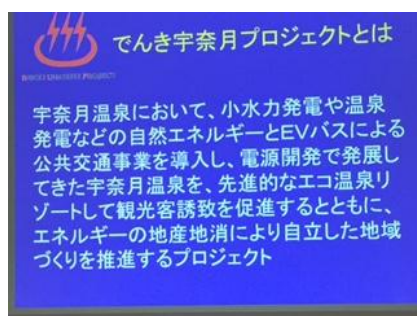
新風クラブ井上恭子

期 日 平成28年7月14日（木）～15日（金）
研 修 名 地方自治学習会in富山県黒部市！
場 所 大高建設(株)会議室、農村文化伝承館、黒部峡谷鉄道、
黒部市役所、YKKファスナーパーク

【7月14日】 大高建設

1部 でんき宇奈月プロジェクト

講師 町野美香氏 一般社団法人 でんき宇奈月プロジェクト事務局長



でんき宇奈月プロジェクトは2009年実行委員会を設立し、地域住民と協力して、豊かな自然環境と共生し、エネルギーの地産地消を目指し小水力発電などの自然エネルギーの公共交通システム形成に向け活動を展開してきた。

この黒部の町ができたのは90年前で、もともとよそへ行くための保養所であり、人が集まってできたの

が宇奈月温泉である。しかし年々観光客が減ってきたため、黒部の観光局、民間団体、関連企業がかかわり、自然エネルギーの聖地づくりのために水力を利用し電気自動車（エミュー）を走らせることになった。ここまでくるには、旅館の従業員や住民との話し合いがなされ、「でんき宇奈月プロジェクト」の皆さんの苦労があったからである。

現在電気自動車「エミュー」は、現在は3台になり、温泉街を回る事業として観光に大いに役立ち観光客も増え、このプロジェクトの効果が表れてきている。今後は高齢者のために買い物と病院通いのために使うことを検討中。また、子どもの環境教育、地元大学によるEV制作など、TV放送で全国に発信していきたいということである。

水を使った電気自動車は、ここだからこそ行われることなので、その地域、その地域に即した資源を使い、まちづくりや観光をしていく必要性を感じた。



講師 山本健太郎 一般社団法人 でんき宇奈月プロジェクト
大高建設株式会社 再生エネルギー事業部



でんき宇奈月プロジェクトは 2013 年に法人化され、地域の想いをカタチにということで、燃料代を抑え電気自動車を走らせるために「蓄電型の公共的地域交通システム」を導入した。

エミューを走らせるためには、まず電気蓄電のために発電所が必要で、水利権問題などがあり苦難を呈し

た。発電所は大高建設の敷地に設置され、何度も失敗を重ねながら進められた。このプロジェクトには最初から大高建設などの民間の専門家がかかわっていたことで、宇奈月谷小水力発電所を設立できたといっても過言ではないことがうかがわれる。今後は民間の力を借りるということを念頭にした計画が必要であると感じた。



エミューの特徴としては、ソーラーパネル搭載、EVなのでクリーンで静かである。対面ベンチシート、コンパクトだけど 10 人乗り、時速 19 km で安心・安全運転手で温泉街をガイドしながら、ゆっくりと走るし、時々止まって黒部の説明をしてくれるので楽しく試乗させてもらった。

今までの黒部溪谷をトロッコに乗っていき来するだけでなく、町の魅力を活かし、水の資源を生かした計画は学ぶべきところがあった。

2 部 地方議員ファシリテーションセミナー

講師 吉崎利生氏 プロ会議ファシリテーター



会議を行うときに、皆さんから意見を引き出し、まとめていくことは、どの会議でも行われている。今回その会議の方法として、ホワイトボードを使いながら、不特定多数の人たちの意見を集約していくホワイトボード・ミーティングとい

う手法を学んだ。その時一番重要なのがファシリテーターであり、その重要性と方法も学んだ。 ホワイトボードミーティングを行う基本的な考え方は、「心の体力」を温めて、みんなが元気になるエンパワメントな組織づくりをすることである。「心の体力」が温かいと、困難な課題にも意欲的にチャレンジできる。難しい時は素直に助け

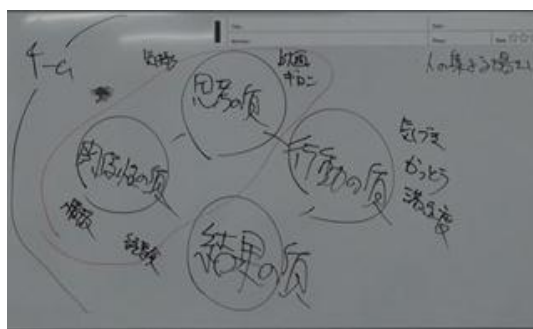




を求め、失敗を糧にして次に進むことができる。ホワイトボードミーティングを行うことにより、みんながエンパワーされる「元気になる会議」を実現できる。

私はすでに 25 年以上前からワークショップという手法を取り入れ、市民の声を集約してきたが、議会でこの手法が広がらないことを非常に疑問を感じていた。それは議会は主張型なので、結論が A と B しかないからであると講師は言う。しかし物事を公平公正に進めるには探求型であるべきだし、

その方法としてその問題に対してなぜなの、どうしたらいいかから始めるべきである。また、現代は何が正しいかわからないし、スピードが速くなってきたので、今までのようなトップダウンの社長型では進まない。また、どの組織も関係性がなければ志向の質が上がらないということを知り、とても納得をした。また、聞く、聴く、訊くの違いを知り、常に聴くという姿勢で相手に対処することなど、とても参考になる話ばかりであった。



意見交換会 農村文化伝承館 山本家



農村文化伝承館山本家は、江戸時代後期中頃の様式と推測される建築物である。山本家はこの地域の旧家であり、先祖は豪農として、また肝煎りや村長として当時の集落の中心のかつ重要な役割を担ってきた家である。

この場所で長浜市、亀山氏、駿河氏、魚頭氏、東浦町、黒部市の市議会議員 11 名で意見交換が行われた。

それぞれの地域の議会の在り方などを聞くことができとても参考になった。

ここは黒部市が指定管理に出した経営しているところで、宿泊費は大人 1080 円であり、我々もここで宿泊した。ここを管理しているご夫婦は、リタイアした後、この場所の魅力を感じ、ほとんど持ち出しであるにもかかわらず管理をしている。この事業は見習うべきではと思った。



【7月15日】 富山県黒部市

1部 黒部溪谷鉄道 説明&乗車



元黒部溪谷鉄道職員であった現在黒部市会議員の方の骨折りで、今回の研修を企画していただいた。その方の案内で、鉄道の歴史などの説明を聞き、黒部溪谷鉄道のトロッコ体験を楽しんだ。行く道中の景色は自然豊かで快適ではあるが、過酷な環境でこのトロッコを山に通したことは信じられないことである。

もともと発電所に行くための作業トロッコを、観光に仕立て上げていったのだが、そのトロッコも、平成20年には90万6千人であった乗降客も年々減少し67万人になってしまった。しかし最近、電気自動車などを使い、観光に力を入れてきたおかげか、平成27年には何とか80万人に増加した。特に韓国からの観光客が多かったが、最近では香港からも増え平成27年度には4万1千人にもなってきた。

今後も観光客増加策のためにいろいろ考えていきたいそうである。

2部 黒部市役所食堂見学



黒部市役所は昨年46億円かけて建設された。その中の食堂は福祉関係に委託し、障がい者の方々も働いている。3方向がガラス張りになっていてしゃれたつくりである。少々狭いので3交代で食べるようになっている。

人口4万人ほどにもかかわらず、広い駐車場も完備されたゴージャスな庁舎であり、昨年には450床の市民病院を建て替え、来年以降には市町舎跡地を複合施設にする計画であるという。国からの交付金の威力をまざまざと感じたところである。

3部 YKKセンターパーク



YKKは上場企業ではないが、全世界に名をはせている。国は一極集中を避けるために、地域に税が分配できるように企業の地域への移転を推進した。現在移転した2会社のうち一つがYKKファスナーである。東京ドーム45個分が入る敷地に工場や施設公園を建設し、道路も整備していった。

これだけファスナーが全世界に普及したのも創業者の吉田忠雄の存在が大きいところである。彼は雪深い魚津町に生まれ、18歳で中国に行ったが、朝鮮戦争で文無しになっている。世界大戦でも親会社の破産があり、過酷な人生を歩んだ人である。吉田忠雄の独自の思想「善の循環」がある。これは他人の利益を図らずして自らの繁栄はないという考え方があったからこそ現在の成功があるのであろう。

この敷地内のYKKパークセンタでは、ファスナーの歴史や作り方のコーナーや、吉田忠雄の展示なども設けられ、企業マンたちが多く訪れるという。

他力本願になるかもしれないが、このような企業誘致が実現できたら、インフラも整備され、一番は雇用の創出である。また、中央からの良い人材が地方に来て、町全体のレベルアップが期待されている。



【常滑市への反映】

人口も4万人というあまり大きくない市でありながら、箱物はとても立派である。それは大いに国との関係がある。しかしある意味恵まれないからそのまちの資源を利用した街づくりをしている。その手法としては民間の力を大いに利用している。

常滑市ももっと民間、いわゆる市民を巻き込んだ事業を行うことが必要ではないだろうか。